

第1回嬉野温泉駅周辺まちづくり委員会 議事録

平成27年2月6日

16:00~18:20

嬉野市役所嬉野庁舎会議室

□現地視察

□委員会

1. 開会

2. 挨拶 中島副市長

- ・「嬉野市心の架け橋手話言語条例」を制定している。嬉野市は人にやさしい、おもてなしの街とかかげており、駅についても日本一のバリアフリーの駅ということを市長が表明している。嬉野温泉駅および周辺がそのようにお客様を迎えられ、また地域を活性化できるように検討していただければと考えている。

3. 委嘱状交付

4. 議事

1) 委員長選出

- ・三島伸雄佐賀大教授を委員長として承認。
- ・三島委員長より副委員長として井手修身委員を指名。

2) 駅周辺まちづくり方針について

○事務局より資料説明。

○主な意見

- ・駅ができることで観光客数は伸びる。今は観光客は車ばかりだが、医療センターの移転もあり、新たな客層が期待できる。降りたら温泉が楽しめる施設があると良い。
- ・新幹線での観光となると宿泊率が高いと思われる。来街者の半分は宿泊すると考えると、プラス20万人、これまでの宿泊客数50万人から激増するのではないか。そのような観光客をどうもてなすかというのは大きな問題。
- ・観光客などの来街者のための交流拠点とするのか、体育館やなど市民のための交流施設とするのかは大きな分かれ道。
- ・道の駅のようなものであっても、駅からも、道からも使えるようにならないか。駅の中に物販などの施設がないのであれば、現在描かれているような配置ではないのではないか。
- ・物販、飲食は、駅から雨に濡れずに行けるような範囲にあれば、乗降客の利用を見込むことは可能であると考えられる。一方、市民のためのコンベンション、集会、イベント、医療センタースタッフのミーティング用のスペースを用意するのも良い。
- ・公園は市街地における祭りとのタイアップなど多目的な利用を考えているかもしれないが、現在の公園と商業施設とを入れ替えて配置することも可能だと思われる。
- ・足湯スポットは市内にすでに2つあるので、足湯だけでなく、入浴施設もあると良い。温泉と健康とはかかわりが深い。駅前の入浴施設と温泉街とをはしご入浴してもらうような連携をすると良い。観光案内所は必須。

- ・周辺地域との連携が必要。嬉野に宿泊し、嬉野を拠点として波佐見や有田などをレンタカーで回る、というプランも考えられる。嬉野および周辺を紹介できる総合的な案内所があると良い。
- ・住んでいる人にとってもメリットのある施設である必要がある。住民は人口が減っていることに危機感を持っており、働く場所や起業する機会が求められている。その意味では新しい商業施設の誘致も考えられる。商店街とのかねあいやしがらみも調整する必要があり難しいかもしれないが。また、鹿島は新幹線が停まらないため、嬉野からの波及効果を期待しているという声も聞かれる。
- ・観光客、市民、医療センター関係者の交流の接点となりうるのか。駅から降りてまず最初にこういう施設で情報を得たいと思うのではないか。道路から少し入っていても、魅力的な施設であれば住民は利用する。
- ・事例を見ると、九州の駅は成功していない。駅を降りてもコンビニやカフェひとつない、作れない。嬉野は、病院の内部だけで自己完結するのか、駅舎の内部だけで自己完結するのか、協議しながら役割分担も考えるべきではないか。観光客の立場で言えば、駅に降りて、雨に濡れない場所に観光案内所や物産館がないと利用する気にはならない。仮に分担せずに観光客は駅舎で完結させてしまうというのであれば、駅の中に温泉を設けるなど、特徴のある駅舎としてもらうよう働きかける、というの
も必要。
- ・ゾーニングで機能をきっちり決めてしまうのは古い考え方。混在、点在も含めて機能の置き方を協議する良い機会。
- ・失敗事例は多いが、それを反面教師として、ここはそうならないようにしていきたい。
- ・駅の中に物産のスペースがあるかないかは影響が大きい。小さくても内部にあればそれで完結してしまう。
- ・ここで出た意見は駅舎設計に反映してもらいたい。
- ・薩摩川内駅や久留米駅は改札を出てすぐのところに物販がある。お客さんには便利が良い。
- ・駅からおりてすぐににぎわいがあるというのが望ましい。現在の公益施設のゾーニングに限定せず議論していきたい。機能についてのメニューとしては、足湯・入浴施設や総合的な観光案内所という意見が挙げられている。これは住民にとって働く場となること、温泉街とも連携ができることが望ましい。